

糸切れ凧

山崎 博

遠い昔、ボードレールやヴェルレーヌを良く知りもせずに懂れていた学生の頃、こんなものを書きつけたことがあります。

「糸切れ凧」

飄々／糸切れ凧は空を舞う

緑の森／その遙か上空を／飄々と

糸切れ凧は空を舞う

山を越え／谷を斜めに見下ろしながら

碧空の遙か彼方へ

何時落ちる身か知らねども
春風に乗り／乱流に巻かれ
秋風に身を任せ
雲の間に間に翻る
嗚呼

凧は空に在りて凧になり
誰かが其処に眞の生命を觀ずや

そして、あらゆる拘束から解放され、自由に
大空を翔るパイロットを夢見ました。まさにサ

ン・テグジュペリの世界を夢見たのです。

航空大学に入ったのは二十一歳の四月。当時の航大は、入学後一ヶ月から飛び始め、二ヶ月後の六月末には単独飛行が予定されており、短期間で単独で出すために、徹底的な厳しい訓練が続きました。それは全て規定通りに飛ぶ訓練で、飛行の各フェーズで速度・高度・上昇率（降下率）・経路・進入角度等、少しでもずれると教官の怒声が飛んでくる。まさしく猿になる訓練でした。

空から見る雲は、気流など気象状況判断の材料でしかなく、山は高度を記憶すべき危険物、河や橋は位置を判断するだけの意味でしかなくなりました。美とか感傷の入る余地もなく、人を猿にする訓練の中で、想像力を失う不安と挫

折感を味わうことになりました。（実は想像力こそパイロットにとって不可欠の要素でした。）

それから三十年後、主に欧州路線を飛んでいた私は、スイスのチューリッヒに何度も飛び、ヴェルナーオーバーランドのグリンデルワルド周辺の山歩きが気に入りました。

グリンデルワルドに泊まった或る朝、ホテルの部屋のヴェランダから、抜けるような初夏の碧空を背にした、アイガーの北壁を仰ぎ見ていた時でした。白い雪氷の合間に、小さい赤い布切れの様なものが、ヒラヒラしているのを見つけた。心もとない動きながら、何と奔放に漂うことかと思つた時、「糸切れ凧だ」と心で呟いていました。まさに忘れかけていた糸切れ

凧を、そこに見つけた思いがしたのです。それは赤いパラグライダーで、おそらく斜面に沿って登る気流に乗り、リッジ・ソアリングをしていたのでしよう。しばらく見とれていた私は、何時の日かパラで飛ぶ事を心に決めました。

結局パラグライダーを始めたのは、更に数年後、六十歳を過ぎていました。基礎訓練後、四百米位の山上からの初飛行は、緊張感があつても、頬を撫でる風を感じながら、わくわくするような開放感がありました。

長く大型旅客機で飛んできた私は、台風の激しい風雨の中の離着陸等も、何度も経験してきました。もともと飛行の操縦は、車の様にダイナミックではなく、微妙で繊細な舵が必要なのですが、台風で機体が揺さぶられ、振り回され

ながらの最終進入では、大胆な舵とパワー操作でその揺さぶりを押さえ込み、相手をねじ伏せて降りたりしたものでした。

糸切れ凧のパラグライダーは、こうした自然との闘いなどは、思いもよらない、思つてはならない世界でした。パラは動力がないので、まさに風次第、離陸にも着陸にも、それこそ「風の谷のナウシカ」の様に、丁寧に丁寧に風を読み、決して逆らうことなく、自然に頭を下げ、遊ばせてもらうのです。

が、パラでも全て平穩無事なフライトではありません。動力がないので、上昇気流を捉えられないと長く飛行はできないし、上手く熱上昇気流を捉えようと、一気に千メートル以上も上がります。こうした熱上昇気流周辺は、当然なが

ら乱気流があり、構造物を持たないパラグライダーは、乱流で一瞬にして潰されることもあります。春先の激しい熱上昇流の真っ只中で、乱流にガンガン振られ潰されかけ、思わず「ゴメン！」と肩を竦めることもしばしば。潰されると落下しながら回復するのが普通だし、駄目なら緊急パラシュートを投げれば助かると解つていても、怖いことには変わりありません。もともと旅客機では、こうした乱流が予想される所を回避して飛ぶのに（先述の様に離着陸では逃げられない時もあります）パラは、敢えて其処に突っ込んで行く訳ですから、当然震えるような目にも遭う事にもなります。が、これも自然と闘っている訳ではありません。

不測の事態で田畑や樹木の上に着陸せざるを

得ないことが起こつても、状況を受け入れ、その変化に応じた対応すれば、糸切れ凧は、それほど危険な訳ではありません。

パイロットの教官が長かった私は、「Expect the unexpected」の言葉通り、あらゆる事態を想定する想像力を慎重さと、自然への畏敬の念が必要と教えてきました。が、今頃になつて改めて、パラでその本当の意味合いを実感しています。台風の中の大型機での着陸も、「舵とパワーで相手をねじ伏せて」着陸したのではなかったのです。

そんな思いで、糸切れ凧で頬に風を感じながら空に浮かぶと、山の新緑も秋の紅葉も、もつたいないほど綺麗に見えるのは、乗員の最前線を離れた爺さんになったからでしょうか。

この誌は、【季刊 堅守】 戦二十一年 秋（第十卷 第三号）通卷三十七号に掲載されたものを、本人の許可を得てここに掲載しました。

戦二十一年十月二十五日
中島 栄一